

## ティーチング・ポートフォリオ

大学名：大手前大学 所属：国際日本学部 名前：古田 紫帆 作成日：2026年1月27日

### 1. 教育の責任

本学において担当している科目は以下の2種類にわけることができます。

- ・A：1年生必修科目「学びの道しるべ A,B」の担当
- ・B：教職課程（教員免許を取得するために勉強するコース）の科目の担当

### 2. 教育の理念

「1. 教育の責任」において列挙した AB 2 種類の授業カテゴリー毎に説明いたします。

A：

・高校までの学び方から、大学での学び方への切り替わりを支援したい。さらに、慣れない大学生活の不安感に寄り添う仲間の存在が重要であると考えているので、他の学生とのつながりをつくり、お互いに相談し合うことができるようにしたい。

B：

・教育実習で授業が実施できるようになったり、採用試験に合格したりすればよいということだけではなく、学校教育で教員が直面する困難を想定した課題に対して、可能な限り多様な価値観や目標や技能をもつ他者と協働しながら最適解を導くことができるようにしたい。

### 3. 教育の方法

双方ともに ICT を活用しながらすすめることが共通点です。

それぞれの活用方法については、下記のとおりです。

A：

・学生個々とチャットシステム（Teams）を用いて欠席報告や履修相談、課題提出に関わる相談を気軽に行うことができるようにしている。また、学生の関心に合わせて本学図書館蔵書の中からおすすめの本籍情報を発信したり、グループワークで学習内容を模造紙に構造化したものを共有できるようにしたりしている。

・「5plus1」「1on1」など、面談期間は、面談対象者以外の学生を鑑賞しながら学ぶが、できる限り学生の関心に合う動画を選定した。

・el-Campus を用いてお知らせを発信したりレポートを回収したりしている。

B：

・さまざまな文献を自分たちで調査したりした上で、学生同士で対話したり、情報交換しながら考察を深めることができるようにしている。

・提出したレポートを学習管理システムの中で共有して、さらに相互レビューを共有することを重ねて、レポートの質的向上を図る。

・限られた時間を有効に使うことができるように、模擬授業を行いながら、授業観察の能力も高めるようにしている。なお、この方法であれば、なんらかの事情で非対面授業となった場合でも取り組むことが可能である。

・教育実習で使用する可能性が高いクラウド学習支援ツールを段階的に用いて操作に慣れるようにし、それらを活用した授業を構想できるようにする。また、希望者には、ICT の操作練習の支援を課外に実施するようにしている。

・教育実習前の準備学習のため教職課程の3年生・4年生用 Teams チームを構築し、課外に学習指導案の指導を行ったり、自主的な学びを支援するようにした。また、Teams 通話を用いて個人面談も行き、個々の課題を把握するとともに助言できるようにした。

その他（共通点）：

・全学生は PC 必携が義務付けられているため、基本的に印刷資料を配布せず、PDF を配布するようにしている。

・発表への相互コメントなどは、上記のように ICT を活用するとともに、ときには手書きで手渡し交換するようにもしている。

・ICT 活用時は匿名で意見交換することもあるが、発表時はできるだけ発表者の氏名なども手元のワークシートなどに書き留めるようにし、「誰が何を発言したのか」に相互に関心をもつようにする（お互いの名前を覚えてつながりをつくりやすくするため）。

#### 4. 教育の成果

A：

- ・授業アンケートにおいて「グループワークが楽しかった」というコメントが複数みられ、グループワークへの期待が高かった。
- ・面談や学生同士の話の内容から学生の関心を推測し、それらに即した学習動画を選定したことにより、どのようなことに関心があるのかが自身でははっきりわからなかった学生も、リフレクションに「～について興味深く学ぶことができた」と記入していた。

B：

- ・他の学生との議論や調査結果を踏まえた自分なりの考察を、視覚的にも「厚く」まとめることができるようにすることによって、自信につなげるようにしている。例えば「教育の方法と技術」では、多くの学生が10枚程度の最終レポートを作成できるようになっている。また、学生同士で複数回相互評価をして改良した上での提出なので、課題の提出形式上のミスや出題内容の捉え違いなどもほぼみられない（※1）。
- ・授業の中で多様な分野の学生同士ができるだけ交流のきっかけがつかめるようにしたり、授業の中で自分たちに必要な学習機会を企画することを促すようにしたりしたことで、学生同士が主体的に課外学習を実施するようになった。
- ・教育実習で悔いのない実習になるように、また、講師として声がかけていただけるように、教育実習前に自主的な模擬授業の実施や学習指導案の指導について、希望に応じて個別に補足的な指導を行った。また、大学から推薦可能な学生に積極的に声をかけ、大学推薦を利用した教員採用試験を推奨した。これにより、本年度は公立で4名の正規採用が決まり、2名の講師採用が決まった。正規採用の学生については、インタビューの内容が、大学のホームページで紹介もされた（※1）（※2）。

#### 5. 改善への努力と今後の目標

A（1年生必修科目）とB（教職科目）では、今後の目標がそれぞれ対称的なものとなる。Aは当該科目授業が大学生活の最初の居場所づくりとして機能することを目指しているが、そのためには、受講生の嗜好／志向性や経歴等に配慮しながら学生同士の関係づくりを行うことが重要である。今年度、学生同士が話し合うことはできたが、その成果をさらに深める対話をするための時間を確保することが困難であった。今後はたとえばAIなどの活用も検討し、限られた時間内に学生が導き出した知見をさらに深める工夫を考えたい。Bについては、ある程度の厚みのあるレポートを書けるようになることによって、達成度を得ることができやすいが、内容の詰め込みすぎになりやすい。そのため今後はさらに学習ペースに留意しながら進めていく必要がある。また、教科教育法の担当の先生方と連携しながら、模擬授業や学習指導案執筆の練習のための、個々の学生がさらに伸びるための学習ポイントの特定を行い、効率的に指導したいと考える。

#### 【添付資料】

（※1 資料1）大学ホームページで紹介された教員採用試験合格者のインタビュー その1

<https://www.otemae.ac.jp/about/brandmessage/interview/66888/>

（※2 資料2）大学ホームページで紹介された教員採用試験合格者のインタビュー その2

<https://www.otemae.ac.jp/about/brandmessage/interview/66846/>